

# 文化財通信

第12号



令和2年 12月

 京 都 府

## ごあいさつ

京都府では、平成20年7月から、ふるさと納税制度を活用した「文化財を守り伝える京都府基金」を設置しています。この基金は、寄附金の全額を京都府内の歴史的建造物の保存・修理や防災対策などの「文化財保護」に限定し活用するという、全国唯一の特色あるものであり、令和2年10月までに全国から寄せられた御寄附は、3,162件、2億586万円余りに上っています。改めまして皆様方からの御厚志に心より感謝申し上げます。

また、平成21年度から令和元年度までの11年間において、本基金から文化財保護のために、220件、総額1億7,776万円余りを支出しており、文化財を所有する方々から感謝のお言葉を頂戴しているところです。

今年は、新型コロナウイルス感染症によって、府民生活や社会経済活動がかつて経験したことのない甚大な影響を受けた年でありました。さまざまな困難の中、文化財を守っておられる所有者の皆様に関心と敬意を表する次第であります。貴重な文化財を守り、次世代に引き継いでいくために、多くの方々に本基金を知っていただけるよう、さらに努力してまいりたいと考えております。

さて2022年度中の明治以来初の中央省庁の地方移転となる文化庁の京都への全面的な移転を控え、文化力による京都の未来づくりを推進するためには、文化財の保護は欠かすことのできない、ますます重要な取組となります。

今後とも京都を愛する方々と力を合わせながら、しっかりと進めてまいりますので、一層のお力添えを賜りますようお願い申し上げます。



令和2年12月

京都府知事 西脇 隆俊

### 『文化財通信』表紙の「常磐色」と「若菜色」

常盤色

若菜色

この『文化財通信』表紙の題字には「常磐色」（濃い緑）を使用しています。『源氏物語』で、光源氏は、六条御息所を野宮に訪ね、彼女に対する変わらぬ恋心を、永久不変の樹木の緑に例えて、「常磐色」と言っています（賢木巻）。また、表紙の背景は「若菜色」（淡いうぐいす色）を用いました。同じく『源氏物語』で、光源氏の40歳の祝いの席で、養女の玉鬘が若菜を差し出した（若菜巻）ことにちなんで、このようなうぐいす色を用いました。永遠の「常磐」と若く「若菜」に文化財の保護と継承の願いを託したものです。

〔表紙写真：南禅寺三門（重要文化財） 撮影：阪本 歩〕

# 目次

御寄附をいただいた企業へのインタビュー	1
寄附で保護される京都の文化財 ～令和元年度に実施した事業について～	2
御寄附いただいた方々の京都文化体験	6
令和元年度の寄附の状況	9
令和2年度の話	10
「文化財を守り伝える京都府基金」の概要	11

## 文化財こぼれ話

### 文化財のさまざまな保存施設

京都では、貴重な文化財を保存継承していくため、その時代や環境に応じて、さまざまな施設がつくられてきました。

神社の本殿には、創建当初の部材や意匠、彩色が残っている場合がありますが、それらを風雨からまもる役割を果たしてきたのが覆屋おおいやです（写真①）。時代とともに劣化が進み、屋根や柱、さらに板壁も取り換えられていきますが、周囲の景観とも調和し、参拝者が礼拝するところに屋根が取りつくなど、時代の変化に柔軟に対応してきたものといえます。

蔵は、古来より社寺や邸宅、民家などにおいて、さまざまな機能を担ってきましたが、中でも書画や工芸品などの貴重な宝物類を後世に伝える重要な役割を果たしてきました（写真②）。他の歴史的建造物に比べ、壁が厚く閉鎖された空間構造は、防災や保存管理の面でも、より良好な環境であったといえます。

昭和30年代以降は、国宝・重要文化財を中心とした美術工芸品の保存施設として、鉄筋コンクリートによる収蔵庫が建てられていきます（写真③）。耐火性に優れ、自然空調ながら、保存環境にも優れたその機能は、保管されている宝物類をみれば明らかです。近年はより適切な保存環境を求め、温湿度をさまざまな手段を使って管理するようになってきています。これらも文化財の魅力の一つと言えるかもしれません。



①春日神社（長岡京市）



②真正極楽寺（京都市）



③法園寺（八幡市）